

季報

二松学舎大学附属図書館
Quarterly Report

No.119

2024（令和6）年7月

- P2 先人の智恵を学びとるために
—附属図書館長の就任にあたって 小山 聡子
- P3 本と窓と 大塚 敬子
- P4～5 銀座文学散歩
- P6 くずし字学習支援ツールの紹介 後編
- P7 二松学舎大学ブックレット 創刊号『三島中洲入門』の紹介
作家のおやつ巡り⑨
- P8 本学教職員著書紹介

先人の智恵を学びとるために

— 附属図書館長の就任にあたって

附属図書館長 文学部歴史文化学科 教授 小山 聡子

私の専門は、日本中世史である。中世史の中でも、宗教を中心に研究しており、鎌倉仏教のほか、鬼や幽霊、モノノケなどを研究対象としている。鬼や幽霊、モノノケは、人の心を映し出す鏡であるから、宗教史研究の素材として非常に重要である。このようなことを研究テーマとしているので、日ごろから、図書館に所蔵されている歴史書や貴族の日記などの史料集、古書店で購入した史料をめぐりながら過ごしている。

日本には、古くから図書館があった。701年の大宝律令制定にともない、国家の蔵書を管理する図書寮が置かれ、親王や一部の役人には貸出も行われていた。史料を紐解くと、過去の間人が、生きていくための道しるべとして、いかに書物を大事にしていたかが分かる。特に、古代から中世にかけては、国家として何らかの重大な判断を下さねばならないときや不可解な事件が起きたとき、さらには危険を回避したいときなどには、中国からもたらされた書物や日本の歴史書、日記類が大いに活用された。これらは、たびたび書き写され、貴族の手元にも保管され、必要に応じて用いられていた。つまり、単なる読み物としてではなく、実用的な意味を持っていたのである。

たとえば、多くの漢籍を蒐集した院政期の左大臣藤原頼長は、鬼を見るため、中国隋代の年中行事が記された『玉燭宝典』をもとに、ヒキガエルの血を四角い布に塗り、その布を侍の頭にかぶせて百鬼を見る術を試みた。鬼は病や死をもたらすと考えられていた。それゆえ頼長は、その姿を視覚でとらえることによって、危険を回避しようとしたのだろう。結局、血の付いた布をかぶっても鬼の姿は見えぬ失敗に終わったようだが、このエピソードは中国の古い書物への信頼の厚さを示している。

もちろん現代人からすると、ヒキガエルの血を

使って鬼を見ようとするなど、突拍子もないことである。だからといって、彼らが先人の智恵を頼りとして身の危険を防ごうと試みていたことを軽く見てはいけない。なぜならば、不可思議な事象が起きた理由やそれへの対処法が示される書物によって、その事象を「理解」し、心の安定を手に入れることができていたからである。

先の見通しにくい現代社会に生きる我々にとっても、書物から先人の智恵を学びとり、それを道しるべの一つとすることは大切だろう（当然、ヒキガエルの血を塗った布をかぶって鬼を見ようとするのを推奨しているわけではない）。先人の智恵は、いわゆる史料ばかりではなく、各研究分野の学術書や学術論文にも詰まっている。そして、言わずもがな、学問としての学びは、賢く生き抜くための学びにつながっていく。

さて、本学には、九段キャンパス1号館にある九段図書館だけではなく、柏キャンパスの柏図書館もある。柏図書館に所蔵されている書籍は、無料で取り寄せて九段図書館で借りることができる。ぜひ、積極的にこの2つの図書館を活用し、学びを深めていただきたい。

現在の図書館では、モノとして手に取れる本や雑誌だけではなく、豊富なデジタルデータも利用できる。本学の附属図書館では、館内でだけでなく、自宅からでも、図書館のホームページにアクセスし、様々なデジタルデータを利用することができる。また、充実した検索システムも利用できるようになっている。

学生、教職員がより良く図書館を活用できるようにするためには、図書の購入希望をはじめ、様々なご要望やご意見を寄せていただくことが大事だと考えている。先人の智恵を、より適切かつ十分に学び取ることができる附属図書館にすべく、図書館長としてその充実に努めていきたい。

本と窓と

国際政治経済学部国際政治経済学科 専任講師 大塚 敬子

小さいころから、本が好きだった。小学生のときは、図書室でうろうろしながら、タイトルや表装から興味をもった本を手に取り、読んでいた。そのおかげか、文字が好きで、言葉を気にする子になった。文字を書くのも好きだったので、読書感想文がほめられたときはうれしかった。その感想文を学校の放送室から朗読する機会があったのだが、あとで同級生から思いもよらぬ感想の言葉をもらい、人によってものの見方がこうも違うのかということ、軽い衝撃とともに理解した。妙に鮮烈な記憶だ。

中学校の図書室では、司書の先生とのちょっとした会話を通じて、読書の幅が広がった。卒業するときに、その先生から「借りた本の3年間の履歴をみると、内面の変化や成長ぶりがよくわかりますね」と言葉をいただいた。先生にすすめられたのは、信仰のある青年が自分の命を犠牲にして多くの人の命を救うという小説で、こどものころから慣れ親しんだ“おはなし”とは全然違う、これもある意味で衝撃の本だった。それ以降、新潮文庫や岩波文庫などの、書店に行けばこども向けの本とは別の区画に並ぶような本を手取るようになったから、先生の言葉の意味もよくわかる。

高校の図書室の記憶はまったく欠落している。でも、読書傾向の変化は明確だ。現代文の教科書で読んだある評論家の文章にこれまた衝撃を受け、創作ものではなく、評論や社会問題を扱う新書などを読むようになっていった。頭の中で考えたことを、どうしてこんなに的確な言葉で論理的に書くことができるのだろうと、内容よりも、そちらのほうに関心をもった。

本とのよい出会いの場になっていたのは、いつも学校だったようだ。では、大学生のときはどうだっただろう。本からよい衝撃を受けたという記憶は、特にない。なぜか、大学図書館といわれて思い浮かぶのは「窓」なのである。

人混み嫌いだったので、学生たちが殺到するよ

うな授業直前の時間帯には通学せず、まだ人もまばらなキャンパスに到着するようにしていた。授業開始までの時間には、図書館で一人、何冊も本をもってきて机の上に重ね置き、読み比べながら、専門用語多めの授業のノートをまとめなおすことに専念した。正面に窓のある席が定位置だった。まだ個人パソコンもスマホもない時代で、本と手書きのノートというアナログな文字で机の上はあふれており、ときどき目線を上げて、窓越しの景色を眺めた。定義だの概念だの、訳のわからないものに集中していたせいで狭められた世界が、窓のおかげで元通りに広がるような感覚があった。そんな繰り返しの時間を過ごしていたら、評価が厳しいことで知られる先生から、試験でよく書けていた学生の中の一人という評価をいただいた。これは大きな収穫だった。学ぶことが、おもしろくなった。

大学院生時代に通った大学図書館も、まず思い出すのは窓。でも、いい印象ではない。どの席に座っても、近くの窓から見える外の緑が美しかった。旧館の書庫では、歴史を感じさせる意匠の窓から射し込む柔らかな光が、美しい本の世界を演出していた。でもやはり、いい印象ではない。学びへの充実感があったけれど、一方で、劣等感、なぜ自分はここにいるのだろう、ここにいていいのだろうか、いや、いなくていいのでは、、という眩暈のような時間が長く、図書館は、本ではなくて違和感や不安感の庫になっていた。でも、それも無駄ではなかったようだ。その経験があったことで、価値転換してものごとに自分なりの意味を見出す術を身につけることができた。

こうしてみると、本も窓も、その時々で、自分の内側にあるものの感触を確かめるために、そこにあったように思える。でも、窓のない、地下の図書館でも、その感触はきっとわかると確信する日々を、今は過ごしている。

銀座文学散歩

今号では、中央区銀座周辺にある作家ゆかりの場所を紹介します。

東急プラザの裏手にある泰明小学校の入口脇には、「北村透谷・島崎藤村記念碑」①が立っています。神奈川県小田原市に出生した北村透谷（1868～1894）と岐阜県中津川市に出生した島崎藤村（1872～1943）は、共に1881年にこの近くに越して来て泰明小学校に通い、その後は雑誌「文学界」で活躍しました。

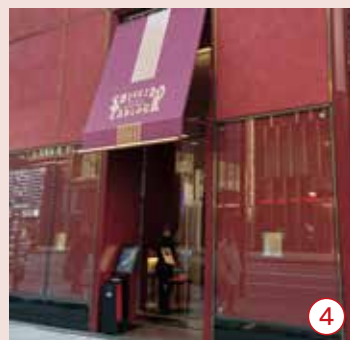
銀座6丁目の東京銀座朝日ビルの前には、「京橋の瀧山町の新聞社灯ともる頃のいそがしさかな」と刻まれた「石川啄木歌碑」②があります。石川啄木（1886～1912）は、かつてこの地にあった東京朝日新聞で1909年3月から夭折する1912年4月までの間、校正係兼朝日歌壇選者として働いていました。

北杜夫（1927～2011）は『マンボウ哀愁のヨーロッパ再訪記』の中で、1895年創業の老舗洋食屋の「煉瓦亭」③を「まさしく銀座の昼食バンザイ！と叫びたくなってしまう美味しさ」と紹介しています。また、食通で知られる池波正太郎（1923～1990）は、14～15歳の頃から通い続けていたそうです。その池波が同じく少年時代から通っていて「戦前の銀座が、いまでも尚、味に残っている」^{*1}と語っているのが1902年創業の洋食の老舗「資生堂パーラー銀座本店」④です。森鷗外（1862～1922）の娘である森茉莉（1903～1987）は、エッセイの中で「父は銀座の資生堂のアイスクリーム以外、そこらの横丁の店ではアイスクリームはたべさせてくれなかった」と書いています。この店には、他にも永井荷風（1879～1959）、谷崎潤一郎（1886～1965）、川端康成（1899～1972）など多くの文豪が訪れています。

1928年に誕生した「銀座・ルパン」⑤は、文壇バーとして里見弴（1888～1983）、石川達三（1905～1985）、坂口安吾（1906～1955）、太宰治（1909～1948）、織田作之助（1913～1947）、などが通いました。ベストを着て、兵隊靴を履いた太宰が肩膝立てて座っている写真で有名な席は今も人気のようです。

1951年に開店し、美輪明宏を輩出した日本初のシャンソン喫茶「銀巴里」には、吉行淳之介（1924～1994）や三島由紀夫（1925～1970）、寺山修司（1935～1983）らが集っていましたが、1990年に閉店し、跡地に立つモンブラン銀座ビルの前には「元銀巴里跡」の石碑⑥が建っています。

1928年に大阪から進出した割烹「本店浜作」⑦は、志賀直哉（1883～1971）や向田邦子（1929～1981）、岩波書店創業者の岩波茂雄など多くの文士に愛されました。坪内逍遙（1859～1935）は、その繁盛ぶりを「浜作の栄えゆるを見れば世の海に不景気の風の吹くとも思えず」と詠んでい



ます。

1948 年創業の「カフェ・ド・ランブル」⑧は、酒を嗜まず珈琲好きだった松本清張（1909～1992）が愛した珈琲店です。本格ネルドリップの珈琲に、甘党の清張は砂糖をスプーン 3 杯入っていたそうです。担当編集者だった藤井康榮氏は、「これといった趣味も持たず、膨大な仕事に立ち向かった清張にとって、コーヒーを飲む時間は、数少ない気分転換の大切なひと時だったに違いない。その超人的な思索や着想に、コーヒーは大いに寄与したと思うのである」※²と当時を回想しています。



1911 年創業の「カフェ・パウリスタ」⑨は、与謝野晶子（1878～1942）、平塚らいてう（1886～1971）、菊池寛（1888～1948）など、多くの文化人が通った老舗のカフェです。佐藤春夫（1892～1964）は自叙伝『詩文半世紀』の中で、「芝公園を出て新橋駅待合室經由パウリスタというのが我々の定期航路となっていた」と述懐しています。



また、久保田万太郎（1889～1963）によれば、「われわれは、開店当初から、この店を愛用した。・・・銀座にでるということは、その店で、三十分でも、一時間でも時間をつぶすことだった。」※³そうです。

「竹葉亭本店」⑩は、夏目漱石（1867～1916）や泉鏡花（1873～1939）などが最良にした 1866 年創業の鰻の老舗で、『吾輩は猫である』では「久しぶりで東京の鰻でも食っちゃあ。竹葉でも奢りませう。」と登場します。

食にまつわる場所が多くなりましたが、文豪達の舌を魅了し、長きにわたって受け継がれた老舗の味を堪能してみたいはいかがでしょうか。

※ 1 『散歩のとき何か食たくなって』改訂 池波正太郎著 新潮社 2003 年刊

※ 2 『作家の珈琲』コロナ・ブックス編集部著 平凡社 2015 年刊

※ 3 『カフェ・パウリスタ物語』改訂 長谷川泰三著 文園社 2014 年刊



くずし字学習支援ツールの紹介

データベースと翻刻プロジェクト

後編



古い資料の変体仮名や、
見慣れない字形の漢字…
「くずし字」の翻刻に挑戦したい！

画像はすべて国立国会図書館デジタルコレクション『諸国産物絵図帳』より

字のバリエーションが知りたい

くずし字データベースで調べてみよう

くずし字データベース検索

運用：ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター

無料

現在使われている平仮名や漢字が、くずし字でどのように書かれていたのかを検索できるデータベースです。古典籍 44 点の画像データから切り取った、くずし字 4,328 文字種の字形データが収録されています（2019 年 11 月現在）。



<http://codh.rois.ac.jp/char-shape/search/>

検索した字形が一覧表示されます。ひらがな「な」で検索してみると、資料別に 24,157 件の画像が表示されました。



文字画像に張られたリンクから、原本のデジタル画像を確認することができます。どこで出てきたのかが一目瞭然！



学習成果を腕試ししてみたい

翻刻プロジェクトに参加してみよう

みんなで翻刻

運用：国立歴史民俗博物館/東京大学地震研究所/京都大学古地震研究会

登録必要・無料

「翻刻」（古典籍や歴史資料の文字を現代の活字に直す作業）を、多数の人の協力で推し進めようというプロジェクトです。入力文字はすでに 3,000 万字以上（2024 年 3 月現在）。文献の閲覧も翻刻の入力もウェブブラウザで行うので、特別なアプリは不要です。



<https://honkoku.org/>

アップロードされている文献の中から、参加する文献を自分で選ぶことができます。



入力は自分ができるところまでで大丈夫。分からないところは他の参加者にゆだねたり、添削をお願いすることができます。



図書資料を探すときは

本学図書館で請求記号 210.029～210.2 や 728～728.5 の書架を探してみたり、OPAC で「くずし字」をキーワード検索してみたりしよう。

二松学舎大学ブックレット 創刊号『三島中洲入門』の紹介



『三島中洲入門』 江藤 茂博、町 泉寿郎 編著
 (二松学舎大学出版会、2024年3月)
 A5判 111ページ 1,500円＋税
 ISBN 978-4-911029-08-4

本書は、二松学舎大学出版会から刊行した『二松学舎大学ブックレット』の創刊号であり、本学の学祖・三島中洲を知る上で重要な文章を収めた。町泉寿郎教授が現代語訳と注を担当した、中洲の文章から厳選した「第一部「中洲講話」を読む」、『二松学舎大学新聞』掲載の文章等から江藤茂博教授が中洲についての興味深い逸話を選んだ「第二部 三島中洲を知る」の二部構成。「附録」には中洲の人的交流図や詳細な年譜も付いており、実質は三部構成とも言える。

中洲の著名な講演「義利合一論」(全文)や建学の精神をしめす「漢学大意」(原文付き)を読めば、中洲の思想の骨格や草創期の二松学舎の姿勢を知ることができ、第一部の「余の学歴」や第二部の中洲の人となり伝える文章を読めば、中洲の人物像も鮮明になる。また、第二部における、渋沢栄一『論語と算盤』における中洲との直接的な交流に関する部分や、平塚らいてう・斎藤拙堂・佐藤一斎・山田方谷・河井継之助・吉田松陰・ボアソナードらと中洲のつながりを知れば、中洲が日本の近代化に果たした重要性を知ることができよう。

文学部国文学科 教授 瀧田 浩

作家のおやつ巡り⑨

林芙美子(1903～1951)は『放浪記』の中で、1869年に文英堂として創業した銀座木村屋が1874年に完成させた、酒種を使った生地であんを包んで焼き上げる「あんぱん」を「木村屋※1」の店さきでは、出来たてのアンパンが陳列の硝子をばおっとくもらせている・・・いったい、何処のどなたさまの胃袋を満すのだろう※2と描写しています。また、吉行淳之介(1924～1994)は市ヶ谷に住んでいた子供時代、お金を握りしめて銀座まで歩いてこのあんぱんを買うのが楽しみだったそうです。※3

芙美子は同じく銀座にある洋菓子舗ウエストのリーフパイも気に入りで、銀座に出かけた際にはお土産に買って帰り、家族にふるまったといいます。場所はp5に掲載している地図でご確認ください。



※1 原文のまま

※2 『放浪記』(岩波文庫) 林芙美子作 岩波書店 2014年刊

※3 『作家のお菓子』コロナ・ブックス編集部編 平凡社 2016年刊

本学教職員著書紹介

『武者小路実篤文学の 構造と同時代状況』

瀧田 浩 著

(文学通信、2024 年 2 月刊行)

菊判 495 ページ 4,000 円+税

ISBN 978-4-86766-032-4



内容を伝えるために言葉を絞りこんだら、素っ気ない書名になってしまった。しかし、意図はあって、人・思想・社会実践の方に焦点が当てられやすい作家だからあえて「文学」を入れ、精緻な研究など不要だろうという先入観を持たれているようだからあえて「構造」を入れ、同時代の資料と絡めて研究されることが少ないからあえて「同時代」を入れたのだ。本書は、武者小路実篤の文学テキストと改めて向き合い、構造を共有し、さらには同時代の文壇や歴史的状況における位相を記述しようとしたものである。

武者小路文学は多面的であって、複眼的な見方をしないと実体がつかめない。いかに多くの研究が表層を単眼で捉えるにとどまり、空を切ってきたことか。たとえば、代表作とされる「友情」や「お目出たき人」についても、語り手の問題などを精密に構造化しようとする非常に複雑な作業が求められるが、そうした分析はあまりなされないまま、前者は素朴な三角関係小説、後者は愚かなストーリー小説と見切られてしまうことが多い。そういうことではないのだ、と、本書では特に小説「お目出たき人」、単行本『おめでたき人』、非戦長編戯曲「ある青年の夢」について、複雑なメカニズムの解明を試みた。

辞書・事典類では武者小路の特徴を「人道主義」、「自己主義」などと説明している。しかし、本書を通読すれば、これらの説明では不正確だと理解できるだろう。白色光には多くの色が含まれており、プリズムにより分解される。白色光のように単純・素朴に見える武者小路文学に対するプリズムの役割を果たすのが本書である。その中で、理想主義的傾向の補色となるリアリズム、社会主義的傾向の補色となる保守主義の存在も指摘した。

独創的にみえる武者小路文学も、同時代の状況を調査してみれば、完全オリジナルではなく、文壇状況・経済状況・文学仲間の刺激などから影響を受けながら生成したことがわかる。調査と分析により、武者小路文学を現実の状況に接地させることができたい。

文学部国文学科 教授 瀧田 浩

編集後記

「季報」119 号をお届けします。

今号では、4 月に就任した新館長からのご挨拶、教員の図書館にまつわるお話、二松学舎大学ブックレットの創刊をご紹介します。

表紙写真のちょうど手前あたりには、ベンチがあります。風を感じながらおやつを食べていると、足元にスズメが数羽…じっと見つめるとやや離れますが、気が付くとまた足元に…。崩れやすいパイなどを食べるときはちょっとしたプレッシャーを感じます。(Sh)

二松学舎大学附属図書館

季 報

第 119 号

発行日 2024 年 7 月 1 日

発 行 二松学舎大学附属図書館

九段図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

電話：03-3263-6364

柏図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井 2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ